

百万円と苦虫女

2008(平成20)年5月29日鑑賞(GAGA 試写室)

★★★



監督・脚本=タナダユキ/出演=蒼井優/森山未來/ビエール瀧/竹財輝之助/齋藤隆成/
笹野高史/佐々木すみ江(日活配給/2008年日本映画/121分)

……天下の美女蒼井優が、果敢に「苦虫女」に挑戦！「目で語る」だけでなく、「背中で語る」そのやるせない演技に注目だ！「百万円貯まったら出て行きます！」宣言から生まれる3つの物語は危なっかしいが、貴重な社会勉強と考えればオーケー……？ この映画から「苦虫女の自立」を学べば、軽々しく「自分を探す旅」などと言えなくなるはず……。

面白い脚本を、あの女性監督が！

『赤い文化住宅の初子』(07年)でがぜん私が注目した1975年生まれの女性監督タナダユキは、『さくらん』(07年)の脚本を書いたことでも有名。プレスシートによると、そんなタナダユキ監督の『百万円と苦虫女』といういかにも面白そうなタイトルの脚本は、知り合いの脚本家から出された百万円のアイディアを拝借して2週間ぐらいで書き上げたとのこと。主演を蒼井優でということは最初から決まっていたのに、「苦虫女」とは失礼(?)だが、「百万円貯めては転々とする女の子」というアイディアは、いかにも『赤い文化住宅の初子』で、「カネ、カネ、カネ……」とつぶやく中学3年生の初子を主人公にしたタナダユキ監督らしいもの(『シネマルーム13』214頁参照)。

そこでまずは、蒼井優扮する21歳のフリーター佐藤鈴子が「百万円貯まったら出て行きます！」と家族に対して宣言するに至った事情から……。

3人三様のバカさ加減は……？

短大を出たものの就職先が決まらない鈴子は、今ウエイトレスのアルバイトをしているが、食費として家に2万円を入れているらしいから、今ドキ多い親元から離れることができない寄生虫みたいな若者に比べればまだマシ。そんな鈴子には同僚からの

「ルームシェアしようよ」との誘いは魅力的だったらしいが、そこでルームシェアの条件や万が一うまくいかなかった場合の解消の仕方など、当然事前に決めておくべきことを何も決めず、流れのままにナアナアで決めてしまうのが今ドキの若者流の悪いところ……？ その結果、女の子2人と思っていたのに、同棲中の男を含めた3人になったり、いざ入居してみると2人が別れたため、何と鈴子と男2人のルームシェアになったりと、やることなすことが無茶苦茶……。「お前には興味ないから、とりあえずこのままで」と言う男の言葉どおり、2人の奇妙なルームシェアが始まったが……。こんな導入部のストーリーを観ていると、3人三様のバカさ加減がよくわかる。そして同時に、さすがタナダユキ監督は若者の生態、とりわけいわゆる「負け組」の若者たちの生態をよく観察しているものだ、と妙に感心。

これでも「前科者」！

「前科者」という言葉にインパクトがあるのは、「前科〇犯」という犯罪常習性のイメージと、その言葉の中に殺人、強盗、強姦など重罪のイメージが含まれているため……？ しかし、法律上の「前科者」には、交通事故を起こして人にケガさせてしまったために略式命令で罰金を納めた人も入るから、ひょっとしてあなたも「前科者」……？ 鈴子が前科者になった事情はじっくり映画を観て確認してもらいたいが、それを観ても今ドキの21歳はまだ子供……？ 前科者になって今やっと出所(?)してきた鈴子を、両親はごちそうをつくって温かく迎えたが、鈴子と違って真面目で優秀、そして有名中学への入試を狙っている小学生の弟拓也(齋藤隆成)は、前科者が家には「ぼくの受験に響く！」と猛抗議。こんな姿を観ていると、形の上では1つ屋根の下で暮しているものの、この家族の絆はバラバラだということがよくわかる。世の中には前科者は多いのだから、自分で自分を「前科者！」と卑下してはダメ。そんなことは忘れて前向きに生きていけばいいのだが、鈴子はなかなかそれができないタイプ……？ そんな家族全員そろった出所祝い(?)の食事の席で、鈴子が宣言したのが前述の「百万円貯まったら出て行きます！」宣言。さあ、これから鈴子はどんな人生設計を……？

貴重な社会勉強と思えばオーケー……？

今ドキは、大学に入ってもロクに勉強せず、バイトに精を出しているだけの学生が

多い。したがって、短大を卒業したばかりの鈴子が、100万円を貯めて家を出た後、①最初は「海の家」、②次は「桃畑農家」への住み込み、③3番目は東京から特急で1時間ほどの地方都市のホームセンターのガーデニングコーナーで働く姿は、私の目には危なっかしくて仕方がないが、それも貴重な社会勉強と思えばオーケー……？ 両親にしてみれば、結果的に「かわいい子には旅をさせよ」を実践しているわけだ。

他方、お姉ちゃんが敢然と昔の同級生たちの「いじめ」に立ち向かっている姿をひそかに目撃した拓也は、それ以降鈴子に対する見方が大きく変わったらしい。したがって、「姉ちゃん、家出たら、手紙ちょうだい」と鈴子への信頼を回復していたから、拓也は時々送られてくる鈴子からの手紙に勇気づけられながら、学校内での陰湿ないじめにも耐えていた。このように、今でも鈴子と両親とは音信不通になっているものの、あの時あれほどバラバラだった家族の絆は、鈴子がちょっと危なっかしい社会勉強を続ける中で少しずつ回復していたのかも……？

第1話と第2話は省略

この映画は121分だが、テンポがいいしストーリーがわかりやすいから、決して長く感じることはないはず。「百万円貯まったら出て行きます！」という導入部の面白いストーリーが終わると、続いて陽気なプレイボーイ風サーファーのユウキ（竹財輝之助）が登場する第1話「海の家」物語が始まる。続く第2話「山間の村」物語では、少しデリカシーに欠けるが心優しい桃畑農家の青年藤井春夫（ピエール瀧）とその母親絹（佐々木すみ江）、そして喫茶店ホワイトの店主白石（笹野高史）らが登場する。そこで展開される「桃娘騒動」は面白いだけではなく、東京と地方の格差問題、山村の農業問題、限界集落問題についての鋭い問題提起！ この第1話と第2話をこれ以上紹介すると長くなるので、残念ながら以下は省略。

第3話のポイントは……？

ここでは、若手の注目株森山未来が登場する第3話のポイントだけ紹介しておこう。森山未来が演ずるのは、鈴子の先輩店員中島亮平。中島は大学に真面目に通っているようだが、一瞬にして鈴子が「歓迎飲み会」が苦手なタイプと見抜いたのはえらい！ もっともそれは、自分も同じ人種だから……。そんな2人には恋が芽生える予感がブンブンと……。たしかに美男美女だから、そんな展開になっていくのが1番率直なス

トリー構成だが、ここで2人が結ばれてハッピーエンドでは映画としては面白くも何ともない。そこでタナダユキ脚本がヒネったのは、心の内を見せることができたはじめての男性だった中島が、鈴子と肉体関係が始まり、それが継続的・日常的になっていく中で、次第にヒモの存在になっていくこと。鈴子はしばらくの間は、そんな中島からの金の無心に応じていたが、ある日鈴子が下した決断は……？ そしてまた、中島がそんな行動をとったのは一体なぜ……？

それが第3話のポイントだから、そこらあたりの機微をしっかりと！

拓也の自立は？ 鈴子の自立は？

鈴子からの手紙にはいつも「お姉ちゃんは元気です。拓也はどうしていますか？」と書かれていたが、いじめは次第にエスカレートしていたから、実は拓也是大変な状況。そんな中にありながらも、鈴子からの手紙に勇気づけられた拓也は、「あいつらとは別の優秀な中学校に入るのだから」という過去の思考回路を少しずつ修正中……。

そんな拓也から届いた手紙を鈴子が読んだのは、中島に対し別れを告げて帰ったアパートの中。その手紙には、遂にある日拓也がいじめっ子たちに対して猛烈な反撃に出たこと、それによって相手をケガさせたこと、その結果拓也は児童相談所に呼び出されたことなどが書かれてあった。そして、最後にはみんなと同じ中学校に行くことに決めたという決意表明があった。これこそ拓也の自立！

そんな拓也の手紙に涙した鈴子が、それまでの自分をふり返り、今後の決意を綴った拓也への返信の手紙はこの映画のハイライト。100万円貯まる直前ながら、中島が住むこの町を出て次の仕事を探すべく重いスーツケースを引きずる鈴子の足どりの力強さと、強い意思が表現された鈴子の顔の表情に注目しよう！

「演技派女優」蒼井優の確立を期待！

若手女優の成長株は、長澤まさみ、沢尻エリカ、堀北真希、上野樹里など数多いが、「演技派」という冠がふさわしい若手女優となると、宮崎あおいと蒼井優が双壁……？ もっとも、女優の質の高さを生かすも殺すも演出次第だから、演技派女優として成長するためには良い作品と良い監督に恵まれることが大切。その点、蒼井優は岩井俊二監督の『花とアリス』（04年）や李相日監督の『フラガール』（06年）など、すばらしい作品とすばらしい監督に恵まれたのはラッキー。

彼女は1985年8月生まれだから22歳にして既によくの出演作があるが、単独主演は『ニライカナイからの手紙』(05年)に続く2本目。そして女性監督とのめぐり合いは今回がはじめて。これまでの男性監督の映画では、蒼井優の清楚さや美しさが際立つシーンが多かったが、今回は今ドキの「負け

秋葉原事件の加藤啓疑 頭だった『赤い文化住宅が派遣社員なら、蒼井宅の初子』(〇〇七年)優渾する鈴子だ。フリーターの延長のような奇妙なタター。加藤啓者は高イトルの脚本を書き、監親、職場、社会への不満で生活に疲れ、世の中が嫌になった陽気、十七の名の縁事件に及んだが、鈴子は何？

「カネ、カネ、カネ」といふやぐ中」の初子から「受験に書」と非

難された鈴子は「百万円貯まったら出て行きませ」と宣言、そこから鈴子のロード・ムービーが始まることに。

海の家のカフェで百万円を貯めた鈴子は、次に山間の村で桃娘は、次に山間の村で桃娘に。第二話は東京と地方の格差問題、山村の農業問題、限界集落問題とい

の動きを的確に描く若手女流監督の腕の冴えに脱帽！

若くて美人なら水筒売で百万円貯金は簡単だが、地味で頑固な鈴子は屋の仕事に頓脚。また、百万円は自分のための目標値。羊山女から脱却し成長・自立していく鈴子の生き方に学びたい。

フリーターだって、こんな生き方が！



百万円と苦虫女

きょうからシネ・リーブル梅田ほかで公開

う鋭い問題視を兼ねているから、その中で鈴子の成長に注目！

面曰いは、第三話の地方都市での中島先輩(森山未來)との絡み。不器用者同士の恋の芽生えは切なく危なっかしいが、なぜ鈴子は中島に心を開いたの？ 肉体関係が続く中、中島はなぜ金をせびり始めたの？ そしてまだ百万円貯まってないのに、なぜ鈴子は飛立ったの？ それが最大のポイント。二人の演技派にまるく嬉しい感情

大阪日日新聞 2008(平成20)年7月19日

組」的で中途半端な生き方しかできない女の子の微妙な心のヒダがうまく表現されている。「目で語る」ことができる女優は多く、蒼井優もそのうちの1人だが、この若さで「背中で語る」ことができる女優は少ない。蒼井優が「背中で語る」のは、拘留所を出てきた後、高い塀に沿って歩く何とも寂しげでやるせない姿。そこで蒼井優が歩きながら口ずさむのは、昔の人気テレビ番組『11PM』のオープニングとエンディングのテーマとされていたあの「シャバダバシャバダバ……」の曲だが、それはもちろん「シャバ」に出てきたことを自ら祝うため……？ そんな「背中で語る」名シーンに注目しながら、「演技派女優」蒼井優の確立を期待したい。

2008(平成20)年5月31日記